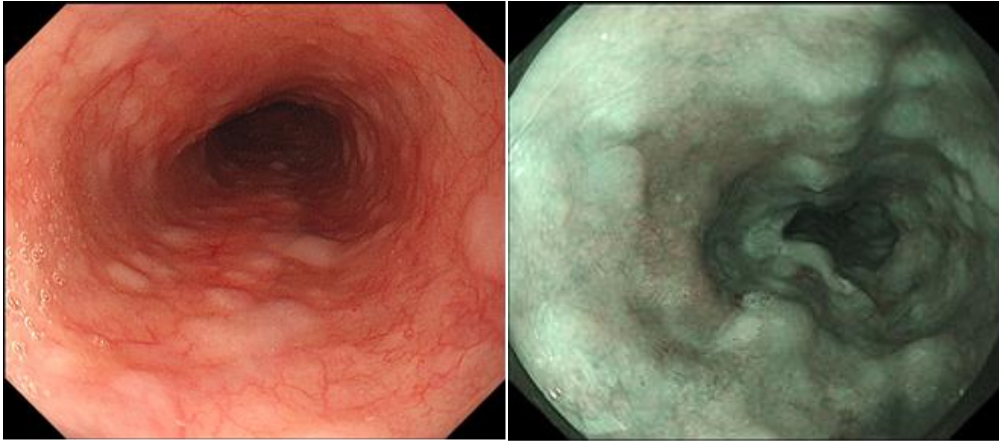


問題②

88 歳男性。検診で施行された上部消化管内視鏡検査にて食道に異常を指摘され、精査・加療のために受診した。自覚症状はない。

再度行った上部消化管内視鏡検査の画像を下に示す。



(1) 肉眼的分類は(a)～(e)のいずれか。

- (a)0- I 型
- (b)0- II c 型
- (c)0-III型
- (d)2 型
- (e)4 型

(2) 同日施行した超音波内視鏡では粘膜固有層までの浸潤が予想された。最も適切な治療は(a)～(e)のいずれか。

- (a)食道全摘
- (b)経過観察
- (c)内視鏡的粘膜下層剥離術
- (d)放射線療法
- (e)化学療法

解答・解説

(1)・・・(b)

0-I型は表在隆起型、0-III型は表在陥凹型、2型は潰瘍限局型、4型はびまん浸潤型であり、本症例は潰瘍を伴わない、境界明瞭な表面陥凹なので0-IIc型の表面陥凹型に相当する。よって(b)

(2)・・・(c)

(a)食道全摘→年齢、病変の予想される深達度に比して最初の治療としては侵襲が大きすぎる

(b)内視鏡を用いた比較的低侵襲な治療で完治を見込めるため、経過観察は最も適切ではない。

(c)内視鏡的粘膜下層剥離術→超音波内視鏡所見からESD適応病変と考えられるためこれを選ぶ。(本症例はLPM癌と考えられ、非全周性(3/4周未満)なので内視鏡的切除が第1選択となる。)断端陽性だった場合に次の治療方針を考える。

(d)放射線療法は食道癌に用いるが、本症例はLPM癌で非全周性(3/4周未満)と考えられるので内視鏡的切除が第1選択となる。

(e)化学療法は食道癌に用いるが、本症例はLPM癌で非全周性(3/4周未満)と考えられるので内視鏡的切除が第1選択となる